

山岳神話

屋久島の内側にある奥岳山嶺は、古くから神々、すなわちカミの聖地として崇拜されてきました。奥岳は、なだめる必要のある霊が住んでいる恐ろしい場所として見られていました。以下は、カミと雷などの自然現象との古来からのつながりや、島の至る所で見られる神道と仏教の融合を示すいくつかの地元の神話です。

天の太鼓

毎月1日と15日に奥岳の山中に異様な音が響いていました。それは、夕方、真夜中、明け方など、さまざまな時間に聞こえてきました。その音はいつもひとつの山頂から別の山頂へと移動していました。村人たちは山の神のしわざであると信じ、その音を「天の太鼓」と呼んでいました。また、中秋の名月から太陰暦の第九の月にかけて毎晩笛や太鼓の音が聞こえ、人々はその音を神々が楽しんでいる音だと考えていました。

天の岩

安房集落の奥にある太忠岳の山頂には、天の岩（テンチュウセキ）として知られる外周60メートル、高さ40メートルの花崗岩の一枚岩が立っています。安房では、この山の頂上にある花崗岩一枚岩に開いている大きな穴が、ほら貝を吹くような音を出すと信じられています。この音が聞こえると、三日以内に強い風が吹きます。地元の人々はこの岩を石の権現、すなわち、神道の神に化身して人々を救いに導く仏様であるとして崇めていました。安房は安房川の河口に位置しており、船着き場もあり、仏僧を含む人の往来が多くあったと考えられます。

六世紀半ばに中国から仏教が伝来した後、土着の神道の考え方と仏教の考え方を融合しようとする試みがなされました。神仏習合と呼ばれる、神道と仏教の融合を目指すより大きな運動の一環として、仏教の神々がカミとして登場するのは一般的なことでした。

しかしながら、安房の北東にある集落、船行は仏教の影響をあまり受けなかったのかもしれない。この集落の言い伝えによれば、天の岩の底部にある祭壇付近の岩石構造の隙間は石笛の穴のような形をしているそうです。西風が吹くたび、この穴は笛のような、幽霊を思わせる音を出します。西風は嵐の前触れであるため、この音は漁師に注意するよう警告します。船行の人々は、太忠岳を仏の化身ではなく、神道の神々の住処であると考えていました。

天の岩はヤクスギランドの駐車場から見ることができます。太忠岳登山道を歩いて行く場合は八時間から九時間かかります。

山姫

山姫は木の精霊です。艶やかで流れるような髪をした美しい女性で、目に映る相手すべてに微笑みかけると言われています。人々は彼女に出会ったときに彼女がほほ笑むより先に

笑顔を見せなければ首から血を吸われてしまうと恐れています。彼女は元旦および五月と九月の山の神の祭りの日に、海水を採取するために山から降りてきます。人々はそれらの日には山に入るなと警告されています。ある物語では、ひとりの青年が山姫に遭遇しましたが、魔除けの**榊**の枝を振り回すことで生き延びたといわれています。